

しもかわふち 下川淵 地下 マップ

◆地理的な特徴

本地域は、約2.4万年前の浅間山の山体崩壊に伴う「羽朝だれ（羽流堤）」によって形成された前橋台地に位置します。台地上を流れる小河川は泥流による堆積物で溝や浸食組織、網目状に流れた結果、微高地と低地に囲んだ地形を形成しました。

縄文時代草創期（1万2000年前頃）に人が暮らした痕跡（猪丸東遺跡、公田東遺跡、公田池尻遺跡）が見つかっていますが、古墳時代以前の遺跡はとても少なく、本格的に集落が形成されるのは古墳時代前半からです。古墳時代には規則的な大開墾が行われ、微高地に集落が作られ、低地に水田が開拓されました。

◆東海地方にルーツを持つS字型の普及

①南部拠点地区遺跡群No. 10, 11

古墳時代前期（3世紀後半～4世紀前半）、東海地方にルーツを持つ口縁部がS字型の土器（S字状口縁台形埴輪（以下S字型））を使用する人が、群馬県に新しい用水技術や高度な配水技術をもたらし、水田開発を進めました。

同時に、堅牢な建物の周りに溝を巡らし、浸水を防止する「外周溝を持つ建物」の建築方法が伝えられ、微高地などでも地下水位の高い本地域などで居住が可能となり、一段と開拓が進みました。「外周溝を持つ建物」は南部拠点地区遺跡群、横手湯田跡などで20年以上確認されています。

ただ、古墳時代中期頃、こうした建築姿勢は姿を消しており、微高地にも水田開発が進んだようです。



水田の下から現れた古墳時代前期の落葉。
鉢は削ぎ落とされた外周溝をもつ堅牢な建物跡（数字で示したところ）が連なる。手筋がNo. 11
遺跡、上方はNo. 10遺跡の遺物。



◆S字型の特徴

S字型は、厚さが1~3mmと極めて薄く、表面にはハナヅレと呼ばれる細かい織形がつづられ、口縁部は2倍以上S字型に屈曲した特徴的な土器です。古墳時代中期にカマドが埋入される以前、堅牢な建物の中の炉に置いて、火が効よく燃えるように台が付き、熱が良く伝わるよう薄く改良されたものと言われています。



左上写真・7の建物跡の外周溝から出土したS字型を含む土器群
(南部拠点地区遺跡群No. 10)
ほとんどの建物が東海系といわれる土器で、3世紀末頃のものとみられる。

*本市刊行の発掘調査報告書は、奈良文化財研究所「全国発掘調査報告書」からダウンロードすることができます。



◆櫛山ニツ岳の火山灰に埋もれた古墳時代のミニ水田

②南部拠点地区遺跡群No. 11, 12

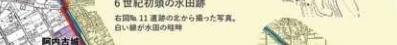
南部拠点地区遺跡群No. 11, 12で、6世紀初頭の櫛山ニツ岳噴火による火山灰に埋もれた極小区画の水田（古墳時代に県内が多く確認されている水田面積は3m前後、本道跡は各地形に影響され5m程）が25面確認されました。北側の横長の大まかな水田で水路から流れてきた水を一度ためてから配水し、下区画に水を行き渡らせていたと考えられます。水口の位置は必ず逆戻しで水を流していたと推察されます。

こうした水口は一見非効率に見えますが、近年の研究で地形を利用した効率的な水管理を行うことをした水田であることがわかりました。その後、牛や馬で轍をひかせて田畠を耕す牛馬耕の導入により水田区画が拡大したといわれています。

そのため、牛や馬で轍をひかせて田畠を耕す牛馬耕の導入により水田区画が拡大したといわれています。



6世紀初頭の水田跡
右写真：遺跡から出土した写真。
白い縁が水田の輪郭



◆条里水田の開発時期はいつ?

③南部拠点地区遺跡群No. 11, 12

本地域では、天仁元（1108年）の浅間山噴火による軽石（浅間B軽石）によって埋没した条里水田が多数確認されています。条里制の一坪の単位とは同じ長さの109~110m間隔の大規模な耕跡（あぜ）が、軽石の上にように設けられていました。こうした条里水田の開発がいつ頃始まったのか不明な部分が多いですが、西道遺跡では、条里水田の下での調査箇面で、9世紀後半と考えられる堅牢な建物跡や柱立柱建物跡などの遺構が確認されており、それ以降に開発が行われたと推測されます。

また、近年発掘調査された南部拠点地区遺跡群No. 11では、大駐畔交差地点の下から出土した耕跡から9世紀中期の須恵器や土師器の片手と土師器の大型が出土しており、農耕儀礼が行われた可能性が示されました。そのため、条里水田の施工時期は8世紀中頃にさかのぼる可能性があります。



浅間B軽石下の水田跡 (南部拠点地区遺跡群No. 12)
白い縁が水田の輪郭

大駐畔下の溝跡と農耕儀礼の様子
(南部拠点地区遺跡群No. 11)

◆弘日の大地震の爪痕

④南部拠点地区遺跡群No. 4

弘仁9(818年)、関東地方を震源とした大地震が発生しました。本地域でも地震の揺れにより砂と水の混じった泥水が、地下から地上にかけて噴き出した跡（噴出）が見つかっています。



◆天元元(1108)年の大噴火からの復旧痕跡

⑤横手湯田跡

天元元(1108)年の浅間山噴火は、右大臣藤原宗家の日記「中右記」に「砂煙や灰が空中に振り注ぎ、国内の田畠はすべて埋滅し、一国の害でした」と記述されています。甚大な被害をもたらし、浅間B軽石が広範囲に堆積しました。復旧作業は条里水田の大堀跡に沿って溝を掘り、掘り上げた土と軽石を混ぜることによって土壤化し、敷砂ならびに耕土としていたようです。横手湯田跡では浅間B軽石で埋没した水田の難波はほぼなるような水田跡が上層に残りつつ、埋没箇所で比較的短時間のうちに復旧が行われたことがわかっています。

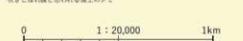


浅間B軽石で埋没した水田(左)とその上層層から見つかった水田跡(右)
吉田吉郎撮影

◆天明3(1783)年の大噴火からの復旧痕跡

⑥横手南川跡

天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流（天明泥流）や降下した飛来A軽石は本地域にも甚大な被害をもたらしました。利根川東岸に接している横手南川跡の西端には天明泥流が河床上に押し寄せた状況が確認されています。こしたて沖積に細長く振り上げ、そこに軽石を埋め込み、下部の土壌で覆かせる「天地返し」による復旧が行われた痕跡が、横手南川跡遺跡、下阿内寺町遺跡、下阿内前田遺跡などで見つかっています。



天地返し復旧跡
吉田吉郎撮影

天地返し模式図